

# 蘆声

幸田露伴

青空文庫



今を距ること三十余年も前の事であつた。

今において回顧すれば、その頃の自分は十二分の幸福というほどではなくとも、少くも安康あんこうの生活に浸ひたつて、朝ちよう夕せきを心にかかる雲もなくすがすがしく送つていたのであつた。

心身とも共に生氣に充ちていたのであつたから、毎日　の朝を、

まだ薄うすもや靄やが村の田の面もや畔くろの樹きの梢こずえを籠こめているほどの夙はやさに

起おきて出でて、そして九時か九時半かという頃までには、もう一家の生活を支えるための仕事は終えてしまつて、それから後はおちついた寛ゆるやかな気分ふんで、読書や研究に従事し、あるいは訪客に接して談論したり、午後の倦うんだ時分には、そこらを散策したりしたも

のであつた。

川添いの地にいたので、何時いつとなく釣ちようぎよ魚ぎよの趣味を合点がてんした。

何時でも覚えたてというものは、それに心の惹かれることの強い

ものである。丁度ちようどその頃一竿いつかんを手にして長流に對する味を覚

えてから一年かそこらであつたので、毎日のように中川なかがわべりへ

出かけた。中川沿岸も今でこそ各種の工場の煙突や建物なども見

え、人の往来ゆききも繁ゆききく人家も多くなつてゐるが、その時分は隅田すみだが

川わ沿いの寺島てらしまや隅田すみだの村でさえさほどに賑にぎやかではなくて、

長閑のどかな別荘地的の光景を存してゐたのだから、まして中川沿い、

しかも平井橋ひらいばしから上かみの、奥戸おくど、立石たていしなどというあたりは、

まことに閑寂かんじやくなもので、水ただ緩ゆるやかに流れ、雲ただ靜かに

屯たむろしているのみで、黄茅白蘆こうぼうはくろの洲渚しゅうしよ、時に水禽すいきんの影みを看  
 るに過ぎぬというようなことであつた。釣つりも釣つりでおもしろいが、  
 自分はその平野の中の緩い流れの附近の、平凡といえれば平凡だが、  
 何ら特異のことのない和易わい安閑たる景色を好もしく感じて、そう  
 して自然に抱いだかれて幾時間を過すのを、東京のがやがやした綺羅きら  
 びやかな境きよう界がいに神経を消しょう耗こうさせながら享受する歡樂など  
 よりも遙はるかに嬉うれしいことと思つていた。そしてまた實際において、  
 そういう中川べりに遊ゆぎ行ようしたり寝転んだりして魚うおを釣つったり、  
 魚うまの来ぬ時は拙せつな歌の一句半句でも釣り得てから帰つて、美しい  
 甘い輕微うまの疲労から誘われる淡い清らかな夢に入ることが、翌朝の  
 すがすがしい眼覚めといきいきした力とになることを、自然不言ふげ

不語んぷごに悟さとらされていた。

丁度秋の彼岸ひがんの少し前頃のことだと覚えている。その時分毎日のように午後の二時半頃から家を出いでては、中川ベリの西にし袋ぶくろというところへ遊びに出かけた。西袋も今はその辺に肥料会社などの建物が見えるようになり、川の流れのさまも土地の様子も大おおに变化したが、その頃はあたりに何かあるでもない江戸がたの一い曲ちきよく湾わんなのであつた。中川は四十九曲しじゅうくまがりといわれるほど蛭えんえ蛭えんえ屈曲して流れる川で、西袋は丁度西の方、即ち江戸の方面へ屈曲し込んで、それからまた東の方へ転じながら南へ行くところしやうで、西へ入って袋の如くになつているから西袋という称も生じたのであろう。水は湾 《わんわん》と曲り込んで、そして転折し

て流れ去る、あたかも開いた扇の左右の親骨を川の流れと見るな  
 らばその蟹目かにめのところかが即ち西袋である。そこで其処そこは釣つり綸いとを  
 垂れ難い地ではあるが、魚は立廻ることの多い自然に岡釣おかづりの好  
 適地である。またその堤防の草原くさはらに腰を下して眸ひとみを放てば、上  
 流からの水はわれに向つて来り、下流の水はわれよりして出づる  
 が如くに見えて、心持の好い眺めである。で、自分は其処そこの水みずぎ  
 際わに蹲うずくまつて釣つたり、其処そこの堤てい上じょうに寝転がって、たまたま  
 得た何かを雑記帳に一行二行記しつけたりして毎日たのし楽んだ。特に  
 その幾日というものは其処そこで好い漁をしたので、家を出る時には  
 既に西袋の景を思おも浮うかべ、路を行く時にも早く雲影うんえい水光すいこうの  
 わが前まへにあるが如き心地さえしたのであつた。

その日も午前から午後へかけて少し頭の疲れる難読の書を読んだ後であつた。その書を机上に閉じて終つて、半盞の番茶を喫つりよう了し去つてから、

また行つてくるよ。

と家内に一言して、餌桶と網魚籠とを持って、鰐広の大麦藁帽を引冠り、腰に手拭、懐に手帳、素足に薄くなつた薩摩下駄、まだ低くならぬ日の光のきらきらする中を、黄金色に輝く稲田を渡る風に吹かれながら、少し熱いとは感じつつも爽かな気分で歩き出した。

川近くなつて、田舎道の辻の或腰掛茶店に立寄つた。それは藤の棚の茶店といつて、自然に其処にある古い藤の棚、といつて



さまで大きくもないが、それに店の半分は掩おおわれているので人  
 にそう呼びならさされている茶店ちややである。路行く人や農夫や行商や、  
 野菜の荷を東京へ出した帰りの空からぐるま車を挽ひいた男なんどのちよ  
 っと休む家うちで、いわゆる三文菓子さんもんがしが少しに、余り渋くもない茶よ  
 りほか何を提供するのでもないが、重宝うちになつていいる家うちなのだ。  
 自分も釣ゆきかえの往復りに立寄つて顔馴染かおなじみになつていたので、岡おかづ  
 釣りに用いる竿つぎざおの継竿つぎざおとはいえ三間げんはん半もあつて長いのをその  
 度 《たびたび》に携えて往復するのは好ましくないから、此家ここ  
 へ頼んで預けて置くことにしてあつた。で、今行掛ゆきがけに例の如く  
 此家ここへ寄つて、

やあ、今日は、また来ました。

と挨拶して、裏へ廻つて自ら竿を取出してみづか 網と共に引担いでひっかつ 来ると、茶店の婆さんは、

おたのしみなさいまし。好いのが出ましたら些御福分けをなすちとおふくわ って下さいまし。

と笑つて世辞をいつてくれた。その言葉を背中に聴かせながら、  
ああ、宜いとも。だがまだボク釣師だからね、ハハハ。

と答えてサツサと歩くと、

でもアテにして待つてますよ、ハハハ。

と背後から大きな声で、なかなか調子が好い。うしろ 世故に慣れているせこ というまででなくても善良の老人は人に好い感じを持たせる、こ  
ういわれて悪い気はしない。駄馬にも篠の鞭、しの という格で、少しむち かく

は心に勇みを添えられる。勿論もちろん未熟者という意味のボク釣師と  
 自みづから言ったのは謙遜的で、内心に下手へた釣師と自ら信じている釣ちよう  
 客かくはないのであるし、自分もこの二日ばかりは不結果だったが、  
 今日けふは好い結果を得たいと念じていたのである。

場ばしよ処へ着いた。と見ると、いつも自分の坐るところに小さな児こ  
 がチャンと坐っていた。汚れた手拭で頬ほお冠かむりをして、大人おとなのよ  
 うな藍あいの細かい縞しま物の筒袖単衣つつそでひとえの裙すそ短みじかなのの汚れかえつ  
 ているのを着て、細い手脚てあしの渋紙しぶかみ色いろのを貧相ひんそうにムキ出して、  
 見すばらしく蹲しゃがんでいたのであった。東京者ではない、田舎この此  
 辺こちの、しかも余り宜よい家うちでない家の児であるとは一目に思い取ら  
 れた。髪の毛が伸び過ぎて領首えりくびがむさくなっているのが手拭の

下から見えて、そこへ日がじりじり当っているので、細い首筋の赤黒いところに汗が沸にえてでもいるように汚らしく少し光っていた。傍そばへ寄つたらプンと臭そうに思えたのである。

自分は自分のシカケを取出して、穂竿ほさおの蛇へびくち口に着け、釣竿を順つなに続いて釣るべく準備した。シカケとは竿以外の綸いとその他の一具ちぐを称する釣客の語である。その間にチヨイチヨイ少年の方を見た。十二、三歳かと思われたが、顔がヒネてマせて見えるのでそう思うのだが、実は十一か高 《たかだか》十二歳位かとも思われた。黙ってその児はシンになって浮子うきを見詰めて釣っている。潮しほは今ソコリになっていてこれから引返ひっかえそうというところであるから、水も動かず浮子も流れないが、見るとその浮子も売物うりもの浮

子うきではない、木の箸はしか何ぞのようなものを、明らかに少年の手わざで、釣糸とつくりに徳利とつくりむすびにしたのに過ぎなかつた。竿も二間けんばかりしかなくて、誰かのアガリ竿を貰いか何ぞしたのであるうか、穂先が穂先になつてない、けだし頭が三、四寸折れて失うせて終しまつたものである。

この児は釣に慣れていない。第一此処ここは浮子釣うきづりに適していない場である。やがて潮が動き出せば浮子は沈子おもりが重ければ水に撓しおられて流れて沈んで終しまうし、沈子が軽ければ水と共に流れて終しまうであらう。また二間ばかりの竿では、此処ここでは鉤はり先さきが好い魚の廻るべきところに達しない。岸きし近ぢかに廻るホソの小魚こぎかなしか鉤はりには来らぬであらう。とは思つたが、それは小児こどもの釣であるとすれば

とかくを言うにも及ばぬことであるとして看過すべきであるから宜い。ただ自分に取つて困つたことはその兎の居場処であつた。それは自分が坐りたい処である。イヤ坐らねばならぬところである、イヤ当然坐るべきところである、ということであつた。

自分が魚餌を鉤に装いつけた時であつた。偶然に少年は自分の方に面を向けた。そして紅桃色をしたイトメという虫を五匹や六匹ではなく沢山に鉤に装うところを看詰めていた。その顔はただ注意したというほかに何の表情があるのではなかつた。しかし思いのほかに目鼻立の整つた、そして伶俐だか氣象が好いか何かは分らないが、ただ阿呆げてはいない、狡いか善良かどうかは分らないが、ただ無茶ではない、ということだけは読取れた。

少し気の毒なような感じがせぬではなかったが、これが少年でなくて大人であつたなら疾とつくに自分は言出すはずのことだつたから、仕方がないと自分に決めて、

兄さん、濟まないけれどもネ、お前の坐つているところを、右へでも左へでも宜いから、一間半か二間ばかり退どいておくれでないか。そこは私が坐るつもりにしてあるところだから。

と、自分では出来るだけ言葉を柔やさしくして言つたのであつた。

すると少年の面上には明らかに反抗の色が上あつた。言葉は何も出さなかつたが、眼の中うちには威いをあらわした。言葉が発されたなら明らかにそれは拒絶の言葉でなくて、何の言葉がその眼の中の或物に伴なおうやと感じられた。仕方がないから自分は自分の意

を徹しようとするために再び言葉を費さざるを得なかつた。

兄さん、失敬なことを言う勝手な奴だと怒つてくれないでくれ。お前の竿の先の見当の真直まつすぐのところを御覧。そら彼処あそこに古い「出し杭ぐい」が列ならんで、乱杭らんぐいになっているだろう。その中の一本の杭の横に大きな南京釘ナンキンくぎが打つてあるのが見えるだろう。あの釘はわたしが打つたのだよ。あすこへ釘を打つて、それへ竿をもたせると宜いと考えたので、わたしが家うちから釘とげんのうとを持つて来て、わざわざ舟を借りて彼処あそこへ行つて、そして考え定めたところへあの釘を打つたのだよ。それから此処ここへ来る度たびにわたしはあの釘へわたしの竿を掛けてあの乱杭の外へ鉤を出して釣るのだよ。で、また私は釣れた日でも釣れない日でも、帰る時には



きつと何時でも持つて来た餌を土と一つに捏ね丸めて炭団のよう  
にして、そして彼処を狙つて二つも三つも抛り込んで帰るのだ  
よ。それは水の流れの上下に連れて、その土が解け、餌が出る、  
それを魚が覚えて、そして自然に魚を其処へ廻つて来させようと  
いうためなのだよ。だからこういう事をお前に知らせるのは私に  
取つて得なことではないけれども、わたしがそれだけの事を彼処  
に對してしてあるのだから、それが解つたらわたしに其処を譲つ  
てくれても宜いだらう。お前の竿では其処に坐つていても別に甲  
斐があるものでもないし、かえつて二間ばかり左へ寄つて、それ  
其処に小さい渦が出来ているあの渦の下端を釣つた方が得があり  
そうに思うよ。どうだね、兄さん、わたしはお前を欺すのでも強

いるのでもないのだよ。たつてお前が其処そこを退どかないというのなら、それも仕方はないがネ、そんな意地悪にしくなくても好いだらう、根が遊びだからネ。

と言つて聴かせている中に、少年の眼の中うちは段うちに平和になつて来た。しかし末に至つて自分は明らかにまた新あらたに失敗した。少年は急に不機嫌になつた。

小父おじさんが遊びだつて、俺が遊びだとは定きまつてやしない。

と癩かんに触つたらしく投付けるようにいつた。なるほどこれは悪意で言つたのではなかつたが、己おのれを以もつて人を律するといふもので、自分が遊びでも人も遊びと定まつている理はないのであつた。公平を失つた情じょう懷かいを有もつていなかつた自分は一本打込まれたと

是認しない訳には行かなかつた。が、この不完全な設備と不満足な知識とを以て川に臨んでゐる少年の振舞が遊びでなくてそもそも何であろう。と驚くと同時に、遊びではないといつても遊びにもなつておらぬような事をしていながら、遊びではないように高飛車に出た少年のその無智無思慮を自省せぬ点を憫びんしよう笑せざるを得ぬ心が起ると、殆どまた同時に引続いてこの少年をして是かくの如き語を突嗟とつさに発するに至らしめたのは、この少年の鋭い性質からか、あるいはまた或事情が存在して然しからしむるものあつてか、と驚かされた。

この驚愕は自分をして当面の釣場の事よりは自分を自分の心裏に起つた事に引付けたから、自分は少年との応酬を忘れて、少年

への観察を敢てするに至った。

参った。そりやそうだった。何もお前遊びとは定まっていなかつたが……

と、ただ無意識で正直な挨拶をしながら、自分は凝然と少年を見詰めていた。その間に少年は自分が見詰められているのも何にも気が着かないのであろう、別に何らの言語も表情もなく、自分の竿を挙げ、自分の坐をわたしに譲り、そして教えてやった場処に立って、その鉤を下した。

ヤ、有難う。

と自分は挨拶して、乱杭のむこうに鉤を投じ、自分の竿を自分の打った釘に載せて、静かに竿頭を眺めた。

少年も黙っている。自分も黙っている。日の光は背に熱いが、川風は帽の下にそよ吹く。堤後の樹下に鳴いているのだらう、秋あ蟬きぜみの聲がしおらしく聞えて来た。

潮は漸く動いて来た。魚はまさに来らんとするのであるが、いまだ来ない。川向うの蘆洲ろしゅうからバン鴨がもが立って低く飛んだ。

少年はと見ると、干極そこりと異なつて来た水の調子の変化に、些細の板沈子いたおもりと折箸おればしの浮子うきとでは、うまく安定が取れないので、竿を挙げては鉤を打返うちかえしている。それは座を易かえたためではないのであるが、そう思つていられると思うと不快で仕方がない。で、自分は声を掛けた。

兄さん、此処ここは潮しおの突掛つつかけて来るところだからネ、浮子釣うきづりでは

うまく行かないよ。沈子釣おもりづりにおしよ。

浮子釣では釣れないかい。

釣れないとは限らないが、もう少し潮が利いて来たら餌がフアラし過ぎるし、釣つりづらくて仕方がないだろう。

今でも釣りづらいよ。

そうだろう。沈子を持っていないなら、此処ここへおいで。沈子もあげようし、シカケも直してあげよう。

沈子をくれる？

ああ。

自分の気持も坦夷たんいで、決して親切でないものではなかった。それが少年に感知されたからであろう、少年も平和で、そして感謝

に充ちた安らかな顔をして、竿を挙げてこちらへやって来た。はじめはこの時少年の面貌風采ふうさいの全幅を目にして見ると、先刻さつきからこの少年に対して自分の抱いていた感想は全く誤っていて、この少年もまた他の同じ位の年齢の児童と同様に真率で温和で少年らしい愛らしい無邪気な感情の所有者であり、そしてその上に聡明さのあることが感受された。その眼は清らかに澄み、その面おもては明らかに晴れていた。自分は小囊こぶくろから沈子おもりを出して与え、かつそのシカケを改めて遣やらうとした。ところが少年は、

いいよ、僕、出来るから。

といつて、自らみずかシカケを直した。一通りの沈子釣おもりづりの装置の仕方ぐらひは知っているのであつたが、沈子のなかつたために浮子釣うきづり

をしていたのであったことが知られた。

少年の用いていた餌はけだし自分で掘取つたらしい蚯蚓みみずであつたから、聊いささかその不利なことが気の毒に感じられた。で、自分の餌桶を指さし示しめして、

この餌を御使いよ、それでは魚さかなの中あたりが遠いだろうから。

少年は遠慮した様子をちよつと見せたが、それでも餌の事も知つていたと見えて、嬉しそうな顔になつて餌を改めた。が、僅わずかに一匹の虫を鉤はりに着けたに過ぎなかつたから、もつとお着け、魚は餌で釣るのだからネ。

少年はまた二匹ばかり着け足した。

今まで何処どこで釣つていたのだい、此処ここは浮子釣りなんぞでは巧うま



く行かない場だよ。

今までは奥戸の池で釣ってたよ、昨日きのうも一昨日おとといも。

釣れたかい。

ああ、鮒ふなが七、八匹。

奥戸というのは対岸で、なるほどそこには浮子釣に適すべき池があることを自分も知っていた。しかし今時分の鮒を釣つても、それが釣という遊びのためでなくて何の意味を為そう。桜の花頃から菊の花過ぎまでの間の鮒は全く仕方のないものである。自分には合点が行かなかつたから、

遊びじゃないように先刻さつきお言いだったが、今の鮒なんか何にもなりはしない、やっぱり遊びじゃないか。

というと、少年は急に悲しそうな顔をして気色けしきを曇らせたが、

でも僕には鮎あゆのほかのものは釣れそうに思えなかつたからネ。

お相撲すもうさんの舟に無銭ただで乗せてもらつて往還ゆきかえりして彼処あそこで釣つたのだよ。

無銭ただで乗せてもらつての一語は偶然にその實際を語つたのだろ

うが、自分の耳に立つて聞えた。お相撲さんというのは、当時奥

戸の渡船守わたしもりをしていた相撲上りあがの男であつたのである。少年の

談はなしの中には裏面に何か存していることが明白めいぱくに知られた。

そうかい。そしてまた今日はどうして此処ここへ来たのだい。

だつてせっかく釣つて帰つても、今小父おじさんの言つた通りにネ、

昨日きのうは、こんな鮎あゆなんか不味まずくて仕様があつたない、もう少し気の利いた

魚でも釣つて来いって叱られたのだもの。

誰に。

お母<sup>つか</sup>さんに。

じゃお母<sup>つか</sup>さんに吩咐<sup>いいつけ</sup>られて釣に出ているのかい。

アア。下<sup>くだ</sup>らなく遊んでいるより魚でも釣つて来いッてネ。僕下  
らなく遊んでいたんじゃない、学校の復習や宿題なんかしていた  
んだけれど。

ここに至つて合点が出来た。油<sup>ゆう</sup>然<sup>ぜん</sup>として同情心が現<sup>まのあたり</sup>前の

川の潮のように突掛<sup>つか</sup>けて来た。

ムムウ。ほんどのお母<sup>つか</sup>さんじゃないネ。

少年は吃驚<sup>びっくり</sup>して眼を見張つて自分の顔を見た。が、急に無言

になつて、ポツクリちよつと頭かしらを下げ、有難うという意を表したまま、竿を持つて前の位置に歸つた。その時あたかも自分の鉤かぎに魚うおが中あたつた。型の好いセイゴが上あがつて来た。

少年は羨うらやましそうに予よの方を見た。

続いてまた二尾ひき、同じようなのが鉤かぎに来た。少年は焦あせるような緊張した顔になつて、羨うらやましげに、また少しは自分の鉤かぎに何も来ぬのを悲しむような心を蔽おほいきれずに自分の方を見た。

しばらく彼も我も無念しんになつて竿先を見守つたが、魚の中あたりはちよつと途断とだえた。

ふと少年の方を見ると、少年はまじまじと予の方を見ていた。何か言いたいような風であつたが、談話ちよの緒を得ないというのら

しい、ただ温和な親しみ寄りたいたいというが如き微笑を幽に湛えて  
予と相見た。と同時に予は少年の竿先に魚の来つたのを認めめた。

ソレ、お前の竿に何か来たよ。

警告すると、少年は慌てて向直つたが早いか敏捷に巧い機に竿  
を上げた。かなり重い魚であつたが、引上げるとそれは大きな鮒  
であつた。小さい畚ふしに入れて、川柳の細い枝を折取つて跳は  
出さぬように押え蔽つた少年は、その手を小草おぐさでふきながら予の  
方を見て、

小父さん、また餌をくれる？

と如何にも欲しそうに言つた。

アア、あげる。

少年は竿を手にして予の傍へ来た。

好い鮒だったネ。

よくつても鮒だから。せつかく此処へ来たんだけれどもネエ。と失望した口ぶりには、よくよく鮒を得たくない意で胸が一パイになつてゐるのを現わしていた。

どうもお前の竿では、わんどの内側しか釣れないのだから。

と慰めてやった。わんどとは水の彎曲した半円形をいうのだ。が、かえつてそれは少年に慰めにはならず、決定的に失望を与えたことになつたのを気づいた途端に、予の竿先は強く動いた。自分はもう少年には構つていられなくなつた。竿を手にして、一心に魚のシメ込込を候つた。魚は式の如くにやがて喰総めた。こつちは合

せた。むこうは抵抗した。竿は月の如くになった。綸いとは鉄線はりかねの如くになった。水面に小波さざなみは立った。次いでまた水の綾あやが乱れた。しかし終ついに魚は狂い疲れた。その白い平ひらを見せる段になつてとうとうこつちへ引寄せられた。その時予しりえの後にあつて網たまを何時か手にしていた少年は機敏すくに突つとその魚を撈すくつた。

魚は言うほどもないフクコであつたが、秋あきくだ下りのことであるし、育ちの好いのであつたから、二人の膳のぼに上すに十分足りるものであつた。少年は今うらやはもう羨みの色よりも、ただ少年らしい無邪氣の喜色あふに溢れて、頬を染め目を輝かして、如何にも男の兎らしい美しさを現わしていた。

それから続いて自分は二尾ひきのセイゴを得たが、少年は遂に何を

も得なかつた。

時は経<sup>た</sup>つた。日は堤の陰に落ちた。自分は帰り支度にかかつて、シカケを収め、竿を収めはじめた。

少年はそれを見ると、

小父<sup>おじ</sup>さんもう帰るの？

と予に力ない声を掛けたが、その顔は暗かつた。

アア、もう帰るよ。まだ釣れるかも知れないが、そんなに慾張つても仕方はないし、潮も好いところを過ぎたからネ。

と自分は答えたが、まだ余っている餌を、いつもなら土に和<sup>あ</sup>えて投げ込むのだけれど、今日はこの児に遺<sup>のこ</sup>そうかと思つて、

餌が余っているが、あげようか。



といった。少年は黙って立ってこちらへ来た。しかし彼は餌を盛るべき何物をも持っていなかった。彼は古新聞紙の一片に自分の餌を包くるんで来たのであったから。差当って彼も少年らしい当惑の色を浮めたが、予にも好い思案はなかった。イトメは水を保つに足るものの中に入れて置かねば面白くないのである。

やっぱり小父おじさんが先刻さつき話したようにした方が宜いい。明日あしたまた小父さんに遇あつたら、小父さんその時に少しおくれ。

といって残り惜しそうに餌を見た彼の素直な、そして賢い態度と分別は、少からず予を感動させた。よしんば餌入れがなくて餌を保てぬにしても、差当り使うだけ使つて、そこらに捨しまてて終しまいそうなものである。それが少年らしい当然な態度でありそうなもの

であらねばならぬのである。

お前も今日はもう帰るのかい。

アア、夕方のいろんな用をしなくてはいけないもの。

夕方の家事雑役をするということは、先刻さつきの遊びに釣をするのでないという言葉に反映し合つて、自分の心を動かさせた。

ほんとお母さんつかでないのだネ。明日あすの米を磨いだり、晩の掃除をしたりするのだネ。

彼はまた黙つた。

今日も鮒を一尾びきばかり持つて帰つたら叱られやしないかネ。

彼は黯あんぜん然とした顔になつたが、やはり黙つていた。その黙つ

ているところがかえつて自分の胸うちの中に強い衝動を与えた。

お父さんとつはいるのかい。

ウン、いるよ。

何をしているのだい。

毎日かめあり亀有の方へ通つて仕事している。

土工かあるいはそれに類した事をしているものと想像された。

お前のお母さんつかは亡くなつたのだネ。

ここに至つてわが手は彼の痛処つうしょに触れたのである。なお黙つ

てはいたが、コックリと点頭てんとうして是認した彼の眼の中には露が

潤うるんで、折から真赤に夕焼けした空の光りが華 《はなばな》し

く明るく落ちて、その薄汚い頬ほお被りかむの手拭、その下から少し洩も

れている額ひたいのぼうぼう生えの髪さき、垢あかじみた赭あかい顔、それらの

すべてを無残に暴露した。

お母<sup>つか</sup>さんは何時<sup>いつ</sup>亡くなつたのだい。

去年。

といった時には、その赭い頬に涙の玉が稲葉<sup>いなば</sup>をすべる露のようにポロリと滾<sup>こん</sup>転<sup>てん</sup>し下<sup>くだ</sup>つていた。

今のお母<sup>つか</sup>さんはお前をいじめるのだナ。

ナーニ、俺が馬鹿なんだ。

見た訳ではないが情態は推察出来る。それなのに、ナーニ、俺が馬鹿なんだ、というこの一語でもつて自分の間<sup>と</sup>に答えたこの兎の気の動き方というものは、何という美しさであろう、我<sup>われ</sup>恥かしい事だと、愕然として自分は<sup>おおい</sup>大に驚いて、<sup>だいてっつ</sup>大鉄鎚で打たれたよ

うな気がした。釣の座を譲れといつて、自分がその訳を話した時に、その訳がすらりと呑込めて、素直に座を譲ってくれたのも、こういう児であつたればこそと先刻さつきの事を反顧はんこせざるを得なくもなり、また今残り餌のこえを川に投げる方が宜いといったこの児の語も思おも合あわされて、田野の間かんにもこういう性質せいしつの美を持つて生れる者もあるものかと思うと、無限の感が湧起ようきせずにはおられなかつた。

自分はもう深入りしてこの児の家の事情を問うことを差控えるのを至当の礼儀のように思った。

では兄さん、この残り餌を土でまるめておくれでないか、なるべく固くまるめるのだよ、そうしておくれ。そうしておくれなら、わ

たしが釣った魚を悉皆でもいくらでもお前の宜いだけお前にあげる。そしてお前がお母さんに機嫌を悪くされないように。そうしたらわたしは大へん嬉しいのだから。

自分は自分の思うようにすることが出来た。少年は餌の土団子をこしらえてくれた。自分はそれを投げた。少年は自分の釣った魚の中からセイゴ二尾を取って、自分に対して言葉は少いが感謝の意は深く謝した。

二人とも土堤へ上った。少年は土堤を川上の方へ、自分は土堤の西の方へと下りる訳だ。別れの言葉が交された時には、日は既に収まって、夕風が袂涼しく吹いて来た。少年は川上へ堤上を辿って行った。暮色は漸く逼った。肩にした竿、手にした畚、筒

袖すその裾すそ短みじかな頼冠たのむねり姿の小さな影は、長い土堤の小草の路の  
 あなたに段と小さくなつて行くくくぜん。然ぜんたるその様。自分は少時しばらく  
 立つて見送つていと、彼もまたふと振返つてこちらを見た。自  
 分を見て、ちよつと首かしらを低くして挨拶したが、その眉目びもくは既に分  
 んのみよう明には見えなかつた。五位ごい鷲じゆがギャアと夕空を鳴いて過ぎた。  
 その翌日も翌日も自分は同じ西袋へ出かけた。しかしどうし  
 た事かその少年に復ふたび会あうことはなかつた。  
 西袋の釣はその歳とし限ぎりでやめた。が、今でも時その日その場  
 の情景を想い出す。そして現社会の何処どこかにその少年が既に立派  
 な、社会に対しての理解ある紳士となつて存在しているように想  
 えてならぬのである。

(昭和三年十月)



# 青空文庫情報

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第四卷」岩波書店

1953（昭和28）年3月刊

※「裾短」と「裾短」の混在は、底本通りです。

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2007年11月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 蘆声

幸田露伴

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>